

はない。

単に被災地の復興や社会体制・防災体制の変革、我が国や社会の再興を促すだけでなく、エネルギー多消費型文明、効率優先社会、そして巨大な人口システムに相互依存した文明に対して大きな警鐘を鳴らしたものと考えべきだ。

震災を機に、持続可能な環境共生型の文明社会に転換するのか、あるいはこれまでの文明の延長をばく進するのか、重大な岐路にあると思う。

未曾有の被害をもたらした災害が、我々に何を教えるべきか、この時代の節目にあつて、我々が震災に何を学び、どうアクションを起こしたかは、これからの1,000年の行方を決めることになるだろう。1人ひとりに何ができるかを考えた時、自分で学び続ける以外に道はない。自分にできることは少ないが、地域を見つめて自分に何ができ

るのかを考え、地域の1人ひとりがどう動いていくかが重要だ。



撮影：2011.8.5 桂島

個人

停電状態の中唯一生き残ったメディアとしての責任感。

仙台市

板橋 恵子 ラジオパーソナリティー、企画・制作プロデューサー

取材日 2012.3.30

Datefm (エフエム仙台) で長年にわたり番組の制作に携わる。2004年から想定宮城県沖地震への備えとして防災啓発番組を制作。2008年には身近な環境キャンペーンの必要性を感じ、緑豊かな宮城の自然を守る「ForeverGreen」キャンペーンを展開。2012年からフリーとなり番組制作やイベントの企画制作を手掛ける。仙台市復興検討委員会委員として復興計画策定に関わった。

3月11日14時46分

いつもよりも遅い昼食から戻り、歯を磨いて3階の化粧室を出たところで、突き上げるような激しい揺れが起きた。廊下の壁に両手をついて、立ったまま必死で揺れに耐えた。「ああ、ついに、想定宮城県沖地震が起きた…!」と思った。まさに、宮城県沖地震の再来に備えて、7年前に立ち上げた防災啓発番組の中で、「地震の揺れは1分程度で収まります。落ち着いて行動しましょう。」と、再三呼び掛けてきた。1分耐えれば…。しかし、激しい揺れは、1分では収まらなかった。一瞬の間をおいて、また揺れ始めた。そして、さらに1分…。のちに判明するが、3つのプレートが次々と割れたために、3分以上にわたって激震が続いた。以前外国人留学生にインタビューした際、生まれて初めて地震を体験したときの状況を、「大きな怪物が、自分の住んでいるアパートを持ち上げて、揺らしている」ように感じたと話していたことが頭をかすめた。まさに、巨大な力で、ビル



をまるごと、完膚なきまで揺らされ続けている…、「この世の終わり」を意識した。

揺れがおさまった後、がくがくする足で、壁に両手をつきながら、一段一段確かめるように階段を降りて、2階のニュース室に向かう。定禅寺通りのサテライトスタジオからの生放送は、停電で一

時停波、すぐに自家発電に切り替わったものの、緊急地震速報が立て続けに3回も発信されたことでシステム障害を起こし、およそ10分にわたって無音状態が続いていた。15時少し前、放送が再開できるタイミングにニュース室にたどりつき、そのまま、1も2もなくスタジオに駆け込んだ。地震後の第一声を発する。それが、その後、1か月以上にわたって続く24時間体制の震災特番のスタートだった。私自身は、3日間会社に泊りこんで、強い余震が続く中で、何人かのアナウンサーと代わる代わる生放送を続けた。「災害時こそラジオ」、停電状態の中で唯一生き残ったメディアとしての責任感が支えとなった。

今思えば、地震発生がウィークデイの昼間だったことが幸いだった。放送に携われるスタッフがたくさんいたことで、すぐさま特番体制を組むことができた。発災がもし深夜・早朝、休日だったらこうはいかなかった。現場の最も大きな混乱は、停電で、電話もパソコンも使えず、どこからも情報ソースを得られなかったことだ。当初は、地震の震度情報に加えて、自分自身の防災啓発番組の制作に携わっていたことで身につけていた知識を総動員して、「余震が続いています。頭を保護して、身の安全をはかって下さい」「ガラスや看板が落下する危険があります。ビルから離れてください!」「自動販売機は転倒の恐れがありますから、離れてください」「車を運転中の方は、信号機が止まっているので、ゆっくり路肩に止めて車から降りてください」等、注意喚起を伝え続けた。何よりも、「緊迫感をもって、しかし落ち着いて」伝えることを肝に銘じていた。やがて、大津波警報が発令され、「予想される津波の高さ、6m、10m…」と信じられない高さの津波情報を伝えることになる。その後、一局だけ見られる状況になったNHKのテレビからの情報をリライトして発信した。にわかには信じられない津波来襲の映像、「仙台市若林区で2-300人の遺体発見」のテロップ…など、想像を絶する被害の状況から、少しずつ震災の全体像が見え始めてきた。雪が降り出した仙台市内に何人かのスタッフが取材に出て、街中の様子を見て歩き、情報をかき集めるようにして放送していった。Eメールが使えなかったためGメールでリスナーからのメールを受け付け始めると、「今あの地域はどうなっていますか?」「家族と連絡が取れない」「〇〇さん、無事ですか? 私は無事です」などの切実な安否確認情報が次々に送られてきた。固定電話も携帯電話も使えない状態の中で、ラジオが唯一の連絡手段となり、あわせて6,000通を超えるメールが寄せられた。後になって、「ラジオからの声に、どんなに安心し、励まされたことか」という声をたくさんいただいた。深夜にも強い余震が続いたが、不安な中でい



撮影：2011.4.5 気仙沼市

つも聴いている声が聞こえてくることに安心感を持って下さったようだ。「災害時、生き残るメディアはラジオしかない」と我々はずっと言ってきた。今回ははからずも、それを証明することになった。

自宅に戻って

数日後、1時間余り歩いて帰宅。23階建マンションの14階に住んでいる。当然エレベーターは使えず非常階段を登ることとなったが、壁が崩れ落ち、階段が壁から離れているところもあった。フロアのカーペットにも、剥がれた壁やコンクリート片などが散乱していた。おそろおそろカギを開けると、あまりに悲惨な状態に言葉を失い、呆然と立ちすくんだ。玄関からリビングに通じる廊下に置いていた何千枚ものCDやLPがカラーボックスごとすべて崩れ、リビングにたどり着くまでに2時間かかった。食器棚やサイドボードは固定していたものの、扉が全部開いて大事な食器ほど粉々に壊れていた。壁にクラックがはいり、まさに足の踏み場もない状態だった。電気も水もガスも、すべて止まった中で、かろうじて眠るスペースを確保して、布団にくるまった。悪いことに、3日間の必死のがんばりからか、熱が出て数日寝込むことに。余震も続く中で生きた心地がしなかった。

津波で家族を亡くされたり、家も仕事も失うなど、大きな被害を受けられた方々とは比べることができない被災状況に、どこか申し訳なさを感じていた。自分自身は、早い段階から気持ちが落ち着き、平常に戻ったつもりでいたが、震災から1年が過ぎて、ようやく震災直後の番組の同録を聴く気持ちになれた。また、雪の中、並んで食料を手に入れた、路上で卵を買ったなあ…など、震災後の日々を思い返せるようになった。自分は大丈夫と思っていたが、抑え込んでいた気持ちに気づいた。

エフエム仙台の対応

当初は余震情報を主に放送していたが、だんだんと生活情報にシフトしていった。電気の復旧は比較的早かったがガスは遅く、3月23日ごろから、徐々に都市ガスが復旧し始めると、明日はどの地区で開栓作業が行われるかの情報をリスナーは本当に心待ちにしていた。全国津々浦々から応援にかけつけてくれた「ガスマン」たち。「うちには大阪の人がきてくれました。本当に神様のように思えました。」といったメールがリスナーから届いた。また、あの時の安否確認放送の方は無事でしたという報告やお礼のメールも届いた。

音楽を流すことに対しては、最初とまどいがあった。津波で犠牲になられた方が多かったので、海にまつわる曲はやめよう、あまり明るい曲調の曲はさげよう、歌詞の中に刺激する言葉はないか…と選曲には心を配った。ぼつりぼつりとリスナーからもリクエストが来るようになり、音楽に気持ちが癒された、音楽から力をもらえたという感想をたくさんいただいた。リクエストの中には、私たちが避けていた、サザンや桑田さんなど、海にまつわる曲が意外なほど多かった。

津波で家も船も流された漁師さんの、「1日も早く、また海に出たい」という言葉が、テレビから流れた。四方を海に囲まれた日本、たくさんの恵みを与えてくれる一方で、過去何度も手痛い被害も受けてきた。恩恵も受けるがダメージも受ける、それが「自然」だと割り切って生きてきた強さを、海辺の方ほど持っているのだと思った。

防災意識を高める 「サバ・メシ*コンテスト」

震災前、宮城県沖地震の発生確率が高かったにもかかわらず、宮城県民の防災意識は、残念ながら全国的にみても低い傾向にあった。番組の発信だけではなく、さらなる防災意識の啓発を目的に、2006年から毎年、『サバ・メシ*コンテスト』と銘打った非常食のコンテストを開催してきた。「サバ・メシ」はサバイバル・メシを略した言葉で、「非常食」では硬いが、「サバ・メシ」というネーミングのおもしろさもあって、たくさんのサバ・メシのレシピが寄せられ、反応も上々だった。サバ・メシのレシピを考える時、災害にあった時、使える食材は何か、水も少なく、使えるツールも限られる…と、身近な「食」を通じて、災害時をイメージし、備えを身につけてもらおうというのがねらいだった。

震災後、コンテストでグランプリになった方からメールをいただいた。「コンテストに参加していたおかげで、子どもたちがとても落ち着いていた」



撮影：2011.3.15 仙台市宮城野区蒲生

という。コンテストに応募するにあたって、何度も家族で話し合っ、災害時をイメージしてレシピを考え、実際に何度も作ってみた経験が、子どもたちの安心感につながったそう。また、震災後、グランプリを獲ったサバ・メシを作って、マンションの皆さんにふるまったというのを伺って、コンテストを行なってきた意義が活かされ、お役に立てたことが何よりうれしかった。

反面、地震への備えについてはさまざま啓発をしてきたが、津波に関してはまったく足りなかった。あんなに沿岸から離れたところまで津波が到達するとは想定できなかったし、津波から身を守る行動や備えについて、メディアとしての意識も啓発も不十分だったと大いに反省している。今後は、「いのちを守る」防災・減災をより高いレベルで、呼びかけていきたいと思っている。

震災を振り返って

昼夜の別なく、24時間営業の店には煌々と明かりが灯り、街のあちこちに自動販売機。必要以上の「便利さ」、行き過ぎた「進化」が、地球環境にダメージを与え続けている状況に、大きな疑問を感じていた。震災が起こったとき、「天罰」という言葉が頭をよぎった。地球が怒っている…と。

震災後数日間、仙台であんなにきれいな星空が見られるとは…。ネオンやビルの明かりがない、まさに「夜」は夜らしく、闇の中で、月も星も本当にきれいだった。夜明けとともに目覚め、夜は早々に家路につく。少しのもので工夫し、今まで言葉を交わしたことのないお隣の方と言葉を交わし、人と人のつながりのあたたかさを感じる…。余計なものが取り払われ、稀薄になっていたものを取り戻し、あの数日間、私たちは、ある意味「ユートピア」にいたのではないかと…。本当に大事なことは何かに気づかされたはずなのだが、普段の暮らしが戻るにつれて、つかの間の「ユートピア」

は消え失せ、ものの見事に、元にもどってしまった。

21世紀に入ってから、世界各地で大規模な自然災害が起きている。環境破壊も含めて地球全体の危機が迫っているのではないかと思う。今回の震災から、私たちは何を学ぶべきなのか。もう一度、自らの生き方を見直し、自然との良い共生の在り方、「進化」ではなく「深化」する人類の在り方を考える必要があると思う。

震災後に立ち上った心のケアの番組で、多くの方にお話を伺うことができた。日野原重明さん、玄侑宗久さん、柳田邦男さん…。いずれも震災がなかったら出会えなかった方たちだ。震災を機に、本当に多くの出会いがあった。東北に、ボランティアという形で全国からたくさんの人たちが来てくれたし、世界中から多くの支援があった。大変な震災だったが、その裏側にあるたくさんの出会いは恩恵でもあると感じている。私たちは、近年誰も体験したことがない未曾有の災害を共通体験し

ただ。その「負」を、プラスに転じられるよう、気持ちを切り替えて前向きに生きてほしいし、自分自身もそうして生きていきたいと思っている。



撮影：2011.4.7 川を埋め尽くした瓦礫



撮影：2011.4.7 石巻市門脇地区



撮影：2011.4.7 津波で壊れた橋



撮影：2011.4.26 名取市役所の連絡掲示板



撮影：2011.4.5 避難所となった体育館